
ほーむれすヴァンパイア

やまゆ

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

ほーむれすヴァンパイア

【コード】

N8012D

【作者名】

やまゆ

【あらすじ】

べちよ。深夜、突然香織17歳の部屋の窓に貼りついて来た物体X。それこそは闇の福音、ヴァンパイア、山田太郎であった……。ヘッタレヴァンパイアと自意識過剰女子高生の送る、小さな(変態との)出会いの物語。

べちよ

その奇妙な音が窓ガラスに響き渡ったのは、草木も眠る丑三つ時。

私が愛PC機

「マリリンちゃん」で某ニコニコする動画に見入っていた時の事だった。

「な、なななな、何……？」

何……？ と訊いても答えは無し。だいたい、ここは正真正銘マシシヨンの7Fであって、いくらワタクシ人生経験豊富な美少女、香織一七歳と言えども、こんな所にべちちゃつと張り付いてくる物の心当たりなんて、

1 幽霊

2 水曜日に燃えないゴミを出した事に激怒した近所のオバちゃん

3 衛星カメラで偶然私を見て一目惚れしたビルゲイツ

くらいしか浮かばないのである。うーん、今のところ最有力候補は2かなあ……。いや〜しかし1の可能性も捨てきれない。3は論外、奴ならまず私の部屋に札束を敷き詰めるはずである。

そうこうアホな事を考えてるうちに、謎の物体Xはズリズリと窓ガラスを這い、マイスイートルームへの侵入を試みている様子。うわ、動いた。てか生物??? なにやら、何か大きな物が黒い布にくるまっている様なのだが、見れば見るほど不気味で正体不明。

「う……大丈夫よね、鍵は掛けてあるし……」

ガチョ

まるで見えない手が触れたかのように、窓の鍵が外れる。

「ヒィー！」

カラカラカラ……

あっけなく窓が開くと、黒い塊がズリズリと這いずって部屋に侵入してくる。そして、あるう事か、腰を抜かしてる私の方へスネーク開始。

ズリズリズリズリ……

えー、何コレ新手の出会い系商法？ こんな謎の物体とも出会えちやう、みたいなー。って、イリマセン！ 愛猫がニンテンドーDSの上にゲロ吐いた時くらいお呼びでない！ 出会いたくない！

「イヤアアアー！ こないで！ 誰かあ！ 誰か助けてえーー！！」

目一杯力を込めて絶叫するも、悲しき女やもめの一人暮しかな。おまけに、隣部屋が爆発しても音だけは漏らさない防音設備がこの

マンションの売りだ。助けが来る気配はナツスイング。

くっ……こんな事ならドールマン五千匹くらい飼っとくけば良かった。自分の身は自分で守るしかないのね。私は必死に力を振り絞り、電気スタンドを握り締めた。涙を瞳一杯に溜め、恐怖に必死に立ち向かう健気な姿は映画のヒロイン並み美しかったに違いない。

「来んなっつってんでしょこの野郎!!」

バシッ

いい感じの音が響き、黒布が宙を舞う。

瞬間！

「うっそぁん……」

そう、黒布の下に現れた奴の正体　それは

美形

チョー美形

サラリとなびく銀の髪、キラめく黄金の瞳がとってもワイルドな超絶美形がおったのである。

「しえええええええええ!!」

と、驚く暇も無く、次なる衝撃が。超絶美形がぐあばしっと抱きついてきたのである。

「うおおおおおおう！！！！」

自慢じゃないがオギャアと生まれて17年、モテ無しコイ無しカ
レシ無しの私である！ 最後に男子と会話したのは三週間前（「消
しゴムとってー」）触れ合ったのは三ヶ月前（「三百七十円のお釣
りです」）である！ その私が今！ 抱擁されている！ 誰に？
超絶美形に！ 嗚呼！ 赤飯炊いてえー！ あれ、てかクサツ！
コイツすげー臭い！ 臭いけど美形！ もう怖いやら恥ずかしい
やら臭いやらで私の心臓はボンバー寸前！

「ああああのっ、ここここれは一体……あうっ……」

ハッ！ ももももしかしてもしかしくなくて、これは、強姦！
?!?!?!?!? ああああ何とかしなきゃ、何とかしなきゃ！

などとパニックっている間も、謎の超絶美形不法侵入者さんはがっ
しと熱い抱擁。じっと私を見つめ、やさしく手を頬へ、そして唇を
ゆっくりと……。

「く……はう……だめ……」

あーあかん、こいつつたら超美形。あー、力抜ける。ああっ、私
つてば、こんな窓からいきなり入ってきた超絶美形にワケも判らぬ
ままに純潔を奪われてしまうワケ？ そんな………ちよ
つとイイかも。

私はついつつとり目を閉じた……。

「いやああああああ離してええええ!!」

不思議と、痛みは無い。そのかわりスーツと身体が軽くなっていく……。

あれ……なんだか……気持ちいい……力が……出ないんだか……
気が……遠く……

薄れゆく意識の中で、見た。

男の口元に光る、鋭い牙を……

チュン……チュン……チュン

えー…真に恐ろしい事件ですね。ご注意下さい。では次は朝ズツバ占いのコーナー……

「うーん……………はあっ！」

こっ、ここはどこ？ 私は誰？ そうだ、私はいきなり男に襲われて……！

慌てて身を起こし、あたりを伺う。

「……………あり？」

窓からサンサンと注ぐ朝日。

囀る小鳥達。

世相にズバツと斬り込むの。

すんげえ爽やかな朝が広がっていた。

……………夢？

なあんだ、夢だったのかー。そりゃあそうだよねー。

「はあー……………良かった。でもあんな夢見るなんて、大丈夫かな私……」

ともかくにも、ホツと胸をなでおろす。が、安心したのも束の間。

「あ、起きたー？」

「ぎいやああーっ！！！！！」

昨日の超絶美形吸血男が、ひよいと視界にズームイン！

「あー、良かったあ、ちょっと心配しちゃったー。僕さあ、すんごいお腹へってさあ、ついつい血イ吸いすぎちゃってー。」

「いやあああああ！ 来ないで！ マジ来ないでー！ 痴漢！ 変態！ 鬼！ 悪魔！ 人殺しー！」

「あのー、お、落ち着いてー……僕の話聞いてー……。それにあのー僕、悪魔と言うよりはヴァンパイ……あぐっふ！」

問答無用で見事なアッパーが決まる。

「いやああああ！ ああつ、こんな美少女に生まれたばかりに私ったら身も心もケダモノにしゃぶりつくされてフライドチキンの骨みたいになっちゃうんだわー！！」

「いやー…美少女？ え、えーと、しゃぶるのは血だけでー……痛い！ アイタタタ！ ひっぱらないで！ ねえ耳ひっぱらないで！」

なにやら吸血男が喋ってるが聞く耳ナッシンである。

「ああつ、美人薄命っていうけど神様ってなんて残酷！ きつと私の美しさに嫉妬したのね！ お願い、私を殺すならばどうか遺骨は

百万本の薔薇に包んで宇宙に打ち上げて」

「あのー？ もしもし？ うー、あのね、僕あーただ君の血をちょびつとねー……ええい！ 人の話をちょつとは聞かんかー！ いや……あの……聞いて……下さい……。」

とうとう吸血男が叫んだ。が、ギロリと睨まれて萎縮する。

「なあによう、せつかく人が悲劇のヒロインに酔いしれてるのに邪魔しないでよう。薔薇は薔薇は美しく散らなきゃならないのよ。」

「うん、君って思考回路が540度くらい捻れてるね。や、だからちょーーっただけお兄さんとお話ししようよ？ 僕達きつと解りあえるはず。」

真夜中にいきなり不法侵入してきてちゅーちゅー血まで吸った口で何を言うか！

「やー、あんまりお腹が減ってたから、つい、フラフラと……も、申し訳ない。でも助かったのである。もう三ヶ月もまとともに食べてなかったのである。」

本当にすまなさそうにそう言うと、美形男はくしゃつと顔を崩してデヘヘーと笑った。

「う。ちょっと、いくらお腹がすいてるからって、血を吸うなんてどうかしてるわ。あなた変態？ えーつと、かりばにずむとか言う……。」

「むぐう、ち、違うのである。僕は変態じゃないのである。」

「や、私ヴァンパイアになっちゃったの??？」

「ノンノン、」

山田はちっちゅちゅ、と指を振る

「血をちょーっと吸われたくらいで崇高なるヴァンパイアになれるなどとはおこがましい。まったく、人間ときたら勝手にポイポイ追加設定を作っては信じるから困る。」

ちっ、この美しいピチピチボディを永久に保てるかと思ったのにあれっ、そういえば。

「ねえ山田、あんた直射日光めっちゃ当たってんだけど。灰になっちゃわないの？」

「太陽の光で干からびるとか、それなんてミミズ？ 三日に一度の日光浴が今時のヴァンパイアスタイルでしょ。それと、あのー、我が名はヴァンであって決して山田などという凡庸な名前ではないのだ。」

「じ、じゃあ十字架は？ 山田！」

「いいよねー！ 最近このロザリオのアクセにハマっちゃってー。……あの、うん、ごめん、名前、山田でミラクル大正解なんだけど、せめて太郎って呼んで……。」

「えー、ちよつと山田！ もう少しヴァンパイアっぽいところはないのー!?」

「ぐすつ……いいよもう……山田でいいもん……。大体、ヴァンパイアの特徴なんて……そういえば、ヴァンパイアになってから自分の姿が鏡に映らなくなったのである。おかげでもう自分がどんな姿だったのか見当も付かない。まあ、自分の顔なんてどうだっていいけど。」

いやいや、そこはかなり重要でしょ。己の美しさを知らないなんて、なんと哀れな。超絶美形の持ち腐れにも程があるわ。

山田（決定）は、心なししょんぼりとしてしまい、ボロい風体がさらにスタボロに。なんだかさすがに憐れだ。

「ね……ねえ、そ、その黒いマントは何？　もしかして、コウモリみたいに空を飛んだり……？」

「やー、これは近所の公園で拾ったんである。寒いときにくるまって寝るとあったかいんだあー。」

ボロ布　　っ！！

嗚呼……。

めまいがしてきた。誰か、この嬉しそうにボロ布に包まってる生物を何とかしてくれ……。

「あんだ……私の血吸って満足ならもう出たってよ。私も昨日の事はノラ犬ならぬノラ吸血鬼に噛まれたと思って忘れるから。」

大体、私はもう学校に行かなきゃならないのよ。そりゃー、超絶美形ヴァンパイアを目の前にして学校なんてちよっと惜しいけど。

私がつつと立ち上がると、山田は急に慌てた。

「そ、そうは行かないのである……。実は、頼みがあるのである……。」

「はい？」

なんだろう、ヴァンパイアが頼み事だなんて。……はっ、まさか私に一目惚れ！？ はうん、だめよダメダメ、いくら私が超絶に可愛いからって！

山田、……ううん、ヴァンは真剣な眼差しで言葉を放った。

「保証人になってほしいのである。」

犯人よー、田舎のお袋さんは泣いてるぞ。ってそりゃ交渉人。そりゃ真下正義。じゃなくて、保証人？ ほんのり莓味の予想を斜め四五〇度ほど裏切った答えですよ。しかも何だ。何の保障だ。コイツの一体何を保障しろというんだ。月たったの三千円で一生涯保障か？ さらに保障人の上に「連帯」の二文字が付いたらレッドゾーンだ。

「はい？」

思わず聞き返した私の前に、ピッと紙切れが突き出された。

「もういいかげんだンボールハウスとはおさらばしたいのだ。なのは身元保証人が居ないと部屋は貸せないと言われたのだ。困っているのだ。……非常に困っているのだ。」

「……………。あんた…………ヴァンパイアの癖にホームレスなの…………？」
こいつ…………ホームレスヴァンパイアだ…………。

道理で匂うわけだわ、山田。

「うつ、べ、別に、夜の公園が怖くて泣きそうになったり、野良犬に追いかけて木から下りれなくなったりしたわけじゃないぞ……っ！ わ、我輩はあのダンボールハウスもなかなか気に入っているのだ！ ただ、ちょっと人間の言う 健康で文化的な生活 に興味を持ってみただけでー！ いいからここに名前を書いて印鑑押すのだ！」

山田は美しい前髪を揺らしてふふんとふんぞり返った。

理不尽だ。マサイ族が居たら槍を突き刺しそうなくらい理不尽なお願いだ。

じよ
だんじゃない。

なああんで私がこんな怪しさ満点の奴の力にならにゃーならんのだ。あつ、しかもこいつ、私の血をチューチュー吸つといてそれは無いわまじで。人間性を疑うね。あ、人間じゃなかった。

「いや、普通に無理！」

私は天高くきつぱりと言いつつ放った。

「ぞんなああああああ！ もう嫌だよおおおおお！ 寒い公園に一人ぼっちは嫌だよおおおおお！！！！ ひもじいよう！ 暗いよう！ 寂しいよぼうおおおう！！！」

うわあ……。見苦しい……。

山田の目からダバダバと涙があふれ出る。うわっ、ちょっと、擦り付けないで！ 鼻水を擦り付けないで！

「うるさい！ 大の吸血鬼がメソメソとー！！ あーもうっ、遅刻しちゃう！ 出てった出てった！ 大丈夫！ あんただったらホストクラブであつという間に豪邸持ちよ！！ 力強く生きてください！ 解散！！！」

そう叫ぶと私は五秒で支度し猛ダツシュで学校へと飛び出した。

キーンコーンカーンコーン

時は一気に過ぎて昼休み。

「ちょっと香織、顔色悪いわよ。なんか、白く干からびたダンゴムシみたいな顔。」

友達に心配されてしまった。私はぎゅむつと教科書を机にねじ込む。

「失礼な！ 誰がダンゴムシよ。古井戸に眠る美女と言え。ううー、だるい……しんどい……」

貧血。ド貧血。もう考えてみれば、アイツのせいで失神するほど強制献血させられた上に、朝ごはんも食べれず。トドメに学校猛ダツシュのおまけ付き。ああ、可愛そうな私。なんという悲劇のヒロイン。しかもこれから地獄のパン争奪戦に出陣せねばならないなんて。

「香織、もしかして寝不足とか？ 不安なのは解るけど。ちゃんと眠りなよ。」

「え？ 何があ。」

「知らないの？ あの事件！」

「事件……？」

やっべ、ここんとこネット三昧でニュースなんぞ見て無かったわ

！。とりあえずここは美少所らしく訝しげに眉をひそめとこ。

「そう……この近くで最近通り魔事件があつたのよ、犯人まだ捕まってないんだって！ 人気のない夕暮れ時に女の子を狙って……」

「きゃああああああ大変！ 超大変！ イケメンが！ 超イケメンが！！ 北欧の秘宝発見みたいな超絶イケメンが ……！！」

二人の会話を遮って、教室に絶叫が轟いた。

北欧の秘宝発見のようなイケメン？

まさか……。

「あのお〜……ここに〜木田香織さんって居ますかあ〜………？」

予感的中、ドアから超絶に美しい顔がにゅっとこんにちはー。

瞬間、教室にどよめきが走った。

イケメンだ！

イケメンだわ……

きつとアイドルだ！

いやいやハリウッドスターに違いない！

いいや仏じゃー！ 仏が垂迹なされたのじゃ！

ウホッ！ いい男

突然の超絶美形襲来に教室は大パニック。クモの子を散らす騒ぎようだ。運悪くドア近くで昼食を食べていた女子がパタリと失神する。

「ち、ちょっと、アンタ何学校まで付いてきてるのよ！」

「あー、やっといたあ香織ちゃんー。」

自分の容姿が戦後最大の大荒れ台風を巻き起こしているとは露も知らず、山田は白い牙をキラーンと輝かせて笑った。

瞬間、教室中の視線と殺気が突き刺さる。

香織だと？ 香織と申したか？

あのイケメンまさか香織の彼氏か！？

イケメン様があの様な下賤の女にお微笑みに！

チイツ！ あの女一体どんな禁断魔法を！？

香織殺害せよ…… SATSUGAIせよ……

仏を惑わすとは何事じゃ！！

やらないか

ヤバい、みんな目がマジだ。ここに居たらジャンヌダルクヨロシク無実の罪で殺されちゃう……！ 逃げねば。私はガツと山田の手を掴むと屋上へ猛烈ダツシユ。

「ぎゃにああああ香織ちゃん痛い痛い！ 引っ張らないで！ ねえ香織ちゃんお願い小指だけ引っ張るのは堪忍ー！！」

超絶美形のシャウトに、失神する女子生徒が続出だったそうなの。

ばんっ

私は屋上のフェンスに山田の顔を押し付けた。

「ちょっと、学校に核弾頭クラスの顔持ってこないでよ!! おかげで教室が軽めのバイオハザードに!」

「むぎゆう……ごめんなさい……僕ってそんなに酷い顔してるんだ……。」

山田はしょぼんとうなだれる。

「……で、今更何の用なのよ! もう話すことなんて何にもないはずよ!」

じとっ、と睨めつける。

「ち、違うのである。こ、これを渡しにきたのである。」

頭をフリフリすると、山田はおずおずと何やら小さな包みを差し出した。見てみると、それは可愛らしく包まれた……

「お弁当?」

「む、そうである。うーその、昨晚は……たくさん血を吸ってしまった上に色々と迷惑をかけたので……あのーあとさっき、勝手にお風呂も借りちゃったので……そのー、お礼というか、せめてものお詫びである。栄養補給をして欲しいのである。」

と、山田は決まり悪そうに頭を掻いた。

栄養補給で。意味が解らない。なぜに、迷惑をかけたからといって、弁当なのか。大体、手作り弁当などという所業は恋にトチ狂った乙女が行う黒ミサであって決して貴様のような超絶美形のやる事ではない。あれか、お前は。

湧き上がるツツコミやら疑問やらを必死にこらえ、とりあえず包みをとく。

パカ

蓋を開け、まじまじと中身を観察する。卵焼き、ほうれん草のおひたし、ミニハンバーグ、タコさんウインナーにウサちゃんりんご。趣向が凝らされたお弁当はもはや芸術の域。

「……これ、アンタが作ったの……!?!」

「うむー！ 味見はしてない。」

美味しそう……けど、吸血鬼の作った食べ物なんて食べて大丈夫だろうか。安全的に厚生省の許可が下りるかしら。ハンバーグにダンボール入ってそう。

ぐくぎゅるる〜

バカ正直な腹め。ええい、ヤケじゃ！ ヤケじゃ！ どうせこのままじゃ昼飯抜きじゃわい。わしゃ食わずに死ぬより食うて死ぬ。

おそるそる箸を伸ばし、卵焼きをポイと口へ。ほんのりと甘い味がお口に広がる。

「……美味しい。」

「当然なのである。」

ふふんと山田が鼻を鳴らす。意外だが、本当に美味しい。深刻な血液不足も手伝って箸が進む。

ぱくぱくぱくぱくぱくぱく

「はい、お茶。」

山田が甲斐甲斐しく水筒のからお茶を注ぐ。気が効くじゃないの。

「ぐくぎゅぐくぎゅ……ぷはーっ！ 生き返るう！ それにしても弁当であんた、んつとにヴァンパイアらしくないわねー。名前も山田だし。あんた本当に齡三百才のヴァンパイアなのー!？」

「う、な、何を言うか、本当でおじゃる。や、凶悪な闇の福音で「じゃるー。」

怪しい。目が泳ぎまくってる。なんだそのマロ口調は。

「大体ねえ、ヴァンパイアって言ったらワイン片手に金塊ばら撒いてゴージャスセレブな古城暮らしが相場でしょーが！　なんでダンボールハウスでポロ布に包まって貧乏その日暮らしなのよ！」

「うう……それは……ヴァンパイアにも近代化の波が押し寄せたというかあー……その、深い事情がー。」

「はい？」

「とっ、とにかく、この法治国家では自由気ままな一人暮らしもマならないのである！　さっさとこの書類にサインするでおじやるー！　詮索するならサインくれであるー！」

「だから嫌って言うてんでしょーがー！！！」

ばぢーん！

怒りの美少女パンチが炸裂する！　山田は

「へぷろ」などと未知の言語を口走って地へ伏した。

「ひどいよう、親父にもぶたれた事ないのにー！」

「いーい！？　一食一飯の恩はこの弁当でチャラ！　金輪際私の輝ける青春のページを汚さないで！　次に私の視界に入ったらサンドバッグと見なす！　判ったわね、この、化け物ー！」

「そ、そんなあー……」

これ以上奴に生活を乱されてたまるか。私は大統領の独立宣言並みに高らかに宣告した。みるみる山田のハの字に傾く。が、かまっていられない。私は踵を返すと、泣き崩れる山田を背に教室へと戻った。そう、平凡な美女子高生の日常へと……。

うーん、しかし、ちょっと気の毒だったかな。

放課後、ぼてぼてと家路を歩きながら、ちょっと良心が思い出し痛みした。

思えば、今の日本って、戸籍も住民登録も無いヴァンパイアにとつて、モーレッツに住みにくい世の中かも。あいつもきつと凄く苦労してるんだろつな……。

「お嬢さんお暇ですか……」

いやいや！ だからって見ず知らずの他人の保証人になるなんて、それ何てナニワ金融道。ましてや相手はヴァンパイア。全裸でスキージャンプに挑むくらい命知らずの暴拳だわ。大体アイツ、絶対家賃払えないだろ！ ああつ、危ない危ない、危うくこの歳で借金大

はっ、さてはこいつが噂の通り魔野郎かー！ うん、どっからどう見ても通りすがりの変態通り魔って感じだねありゃ。って、なんなのもう、ここ最近の私の不幸っぷりたるや美の女神が私に嫉妬していると思えない。って、逃げないと。逃げないとあの朝青龍の双子もどきと合体する羽目につ。

「ハアハア……顔は微妙だけど、むっちりした足に黒ニーソがたまらんなりハアハア」

ちよっと！ どういう意味よ！ 失礼な！

ガッ！

足を掴まれる。

「きゃあっ！」

しまった！

私は無様に地面に投げ出される。

ほーむれすヴァンパイア

「萌ええええ！ パンティー！ 苺柄萌ええ〜！ ハアッハアッハアハア！ ……おっとお嬢さんハアハア抵抗するとハアハアこの聖剣エクスカリピヤーがハアハア喉に突き刺さるんだな」

変態の手にキラリとナイフが光る。

「う……っ」

「ブヒヒ、サーセン……」

ずしりと変態がのし掛かってくる。

うわっ、何をやる、お、重い……ぎゃっ！ 私の上げ底ブラを揉む
なっ！ 中身無いんだから！ ぐえ、ちょ、やめて、顔を近づける
な！ やめてっ！ やめ……

ちょ……ヤバい、これはマジでヤバい……

「ハアハアハアハアハアンハアハア」

湿った息がゴツファーっと顔に降りかかる。

ああ。

私はぎゅっと目を閉じる。

ほーむれすヴァンパイア

今度こそ私、殺されるのかな。

じん、と目の奥が熱くなった

……なによ。

山田はヴァンパイアなのに、気が弱くて、優かった

皮肉だわ

人を殺すのは、いつも人

人間の方が、ずっと残酷で酷いじゃない!!!!!!

「あんたみたいな人間より、山田の方が、ずっとずっとマシよ!」

そう叫んだ、その時 !

バキィッ!

「ぼるじあっ」

ほーむれすヴァンパイア

ふっ、と身体が軽くなった。

「……………!?!」

おそろるおそろる目を開ける。

……………そこには、地面に転がる変態、

そして……………視界に飛び込む黒い背中。

「……………山田ぁ!」

「フゴゴゴゴピギツ! ハアハアおのれ! よくもボクとじよ、じよしこおせいタンとの甘い甘い甘いあまイギツ(舌噛んだ)ハアハア甘い愛のランデブーをおおお!」

意外にも俊敏な動作でつた変態が、ナイフをキラリと振り翳す。またしても、絶対絶命のピンチ!

なのに振り向いた山田は、片手を突き出してにっこりスマイル。

「香織ちゃん、危ないからさがってるのだ。」

「うん……………って、ちょ、ちょっと山田! あんたこそ危ないわよ! バカ、向こう刃物持ってんのよ刃物 っ!」

「グヒヒヒ、と、飛んでバルサンコックローチなんだな。エ、エクスカリピャーの錆にしてくれるんだなああああ!」

変態が雄たけびを上げてドスンドスンと向かってくる。

が、山田はピクリとも動かない。な、何やってんのよ！殺されちゃうわよ！

「……僕ね、本当はヴァンパイアになったの、つい三ヶ月前なんだ。」

ぼつり、と山田が呟いた。

「え？」

「……大変だったよ。実家は追い出されるし、人間を襲う度胸なんて無くて、ひもじいし……。それに何より……。一人ぼっちで、寂しかった。」

変態はもう、目の前だ。

「だから……。君と話せて……。とても嬉しかった。ありがとう。」

「もらったああああああああっグへへゲベベエ！！」

「山田アツ！……！」

ズブリ、とナイフが山田を貫いた　と、思った瞬間！

ゆらり

山田の身体が消えた！

「グピ？」

驚き戸惑う変態。

彼の耳元に、低い声が響いた。

「残像だ。」

バキイイイイイイイイイッ！！

山田の凄まじい一撃が決まった！

「グ

ヒイイイイイイイ

ほーむれすヴァンパイア

「ッ！！！！」

変態は飛んだ。

空を飛んだ。

もう、ものっそい飛んだ。

飛んで飛んで飛んで飛んで、回って回って回って回って、キラんと消えた。

この日、また一つ、ひときわ不気味に輝く星が誕生したという。

「山田！ 山田ア！ 大丈夫！？」

私は山田に駆け寄る。

「んー？ ダイジョブだよ。」

「で、でも……ナイフが刺さって……」

「あー。」

「こしこし、と山田は鼻をこすった。

「日が暮れたから、こんな僕でもちよこつとだけ不死身超人になれるのである。血が満たされてる時だけだね。」

「ふあ……良かったあ。って、そういう事はもっと早く言いなさいよっ！……ち、ちよーつとだけ、し、心配しちゃったじゃないのよー！」

私は山田の眉間をグリグリする。

「痛い痛い痛い地味に痛い！ 堪忍である！ 自分でも忘れてたのであるー！……！」

「なによそのくである ってしゃべり方！ さつきめつさフツに喋ってたじゃん！ テメーキャラ作ってんじゃねーよー！」

「ごめんなさい！ ごめんなさい！ 調子乗りました！」

ん？ 大体コイツって……。私はじつと山田を見据える。

「……あなた、何あんで此処が判ったのよ！？ ……まさか、お昼からずつと付いてたわけじゃ無いでしょうね！？」

金の瞳がたじろぐ。

「あつっ……ち、違つのである、ちよつとの間だけ遠くから眺めて

ようと思ってただけで……。も、もう、行くのである……。もう迷惑かけないのである。」

しゅん、と山田はうな垂れ、くるりと背を向けるとトボトボと歩き出す。

夕焼けに照らされた黒い背中が、しょぼん、と、やけに小さく見えた。まるで、このまま、消えてしまいそうに……。

……………。

仕方のない奴。

ぐつと拳をにぎる。

「ちょっと、待ちなさいよ！ 山田！」

「ほえ？」

振り向いた山田に、びしっと指を突きつける。

「まったく、あんた本当に迷惑の塊よ！ えーと不法侵入でしょ！ 血 吸うでしょ！ 無理な頼み事はするでしょ！ それに学校に押しかけるでしょ！」

「はえ？」

いきなりのマシンガン苦情に困惑した表情をうかべる山田。

「私は気にせず矢継ぎ早にまくしたてる。

「おまけに、頼みもしないのに勝手に人を助けて！ もう散々よ！
これだけやっついて、何のアフターケア無しにどっか行こうとするなんてどんだけー？」

「むい!？」

「だ・か・ら」

私は大きく息を吸い込む。

「たっ、助けてくれたお礼もさせてくれないっていつの？最近のヴァンパイアはさ！」

「おれ…ひ…?」

もう、何がなんだかわからないと言った風情の山田。

そう、お礼。

なんだか気恥ずかしくて、私は視線を泳がせる。

「考えたら私、未成年だから保証人にはなれないのよね。うん。」

「え」

「だから、住むところ無いならうち来なさいよ！ 部屋余ってるし！
大体、一人暮らしじゃあの部屋広すぎるのよ！ ね！ あーあと

言つとくけど、掃除洗濯炊事買い物ゴミ出し当番、未来永劫あんだ
だからね。あ、血は吸わないでよ！あと変な事してきたらコ口
ス！」

一気に言ってしまったからちよつと、しまったかな、と思った。
男と、しかもヴァンパイアと一つ屋根の下なんて。あー、私ってば、
ノリで人生間違えるタイプ。ええい、言ってしまったものは仕方な
い！あとはアイツの返事次第よ！

……。

……。

沈黙の間。

返事が無い。

あれ？

そつと、山田の方を見る。

そこには、ポカーンと口を空けて、突っ立っていた。

「おい、山田？」

「……………あるふえ？」

あるふえ？ じゃないよ。だめだ、日本語が通じてない。
耳元におもいつきり大音量を流し込んでやる。

「だから、うちに、住んでいって、言ってるの！」

山田の目が真ん丸に見開かれた。なんとか理解したらしい。

おー、驚いたフクロウそっくりだな……。

なーんて、思わず考えていると。

「あああああ、ああああありがとおおおおおう！……！ グスッ
！ ああああああ！ ああうううああひがひよふううう！ あああ
う！ グシッ！」

がばしっ！

「ひゃあっ」

いきなり、地球外言語を発して黒い塊が抱きついてきた。そしてそ
のままぎゅっぎゅっぎゅっぎゅっぎゅっぎゅっぎゅっぎゅっぎゅっ。

「ぐえ……」

夕陽をバックに、がっしと重なり合う二人。

次から次へと、歓喜の涙やら鼻水やら様々な汁が、飛び散っては夕日に煌く。

その光景は……なんていうか……微妙。

あーあ、いい男が形無し、でも、本当に嬉しそうなのその姿を見てるうちに、これで良かったんだ、と思った。

それに……なんだから、胸の奥に微かにキュンとした……ような。

き、気のせい、気のせいよね！

ま、いつか。

ノリで人生間違えるのも良いかもね！

ここから先は、また別のお話。

終わっつけ

(後書き)

お読み下さり本当に感謝感激雨暴風雨です(めり込み土下座)

変態：ゲフン、大変拙い文章ですが、クスリとでも笑って頂ければ
幸せです

笑ったついでにすっかり感想なんて、頂けたら嬉しくて悶えます。

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくは PDF 小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8012d/>

ほーむれすヴァンパイア

2009年3月24日11時45分発行